戦後メディア史における新書『私は赤ちゃん』の意義

内藤 寿子[a]

[a]湘北短期大学

【抄録】

一九六〇年に、岩波新書の一冊として出版された『私は赤ちゃん』（松田道雄著）は大きな意義を持つ。ここに込められた「赤ちゃんの立場から育児を考える」という松田道雄の思想は、現在でも色褪せていない。またさらに、『私は赤ちゃん』と、その続編『私は二歳』は、戦後日本の活字メディアの歴史を再考するうえでも重要な作品である。

【キーワード】

松田道雄　　戦後日本の活字メディア　　新書　　『私は赤ちゃん』

1　新書『私は赤ちゃん』の誕生

戦後を代表する小児科医・松田道雄（一九〇八年～一九九八年）の歩みは、一五年戦争下の京都にはじまる。

小児結核を専門とする臨床医として松田道雄が勤めた無料の健康相談所には、「極貧」の証明を手に患者たちがたずねてきた。しかし、診断や投薬を受けながらも、患者たちは、生活のために働きつづけ、病いを悪化させていく。診察の過程でこのような疾病の背景がわかるにつれ、松田は、「生活が苦しくなるほど過労と栄養不良とで親が発病した。それが子どもに感染していくのを、わかっていてとめられない国、それでいて感染から発病までをレントゲンで追跡できる国、それは日本しかなかった」(1) との思いを深めていった。戦中から戦後にかけて、松田道雄は、診察室だけでなく、『結核』（弘文社　一九四〇年）や『赤ん坊の科学』（創元社　一九四九年）をはじめとする著作をとおして、社会から結核をなくすために、とくに自分の意思では感染を避けることができない乳幼児を死から救うために、活動をおこなった。

戦後も一九五〇年代半ばを過ぎると、結核に関する予防や治療の効果が広がり、小児結核の脅威も薄らいでくる。それにともない、松田道雄の活動の主眼も、「いかに乳幼児の死を回避するか」から、「いかに乳幼児を育てるか」へとかたちを変えていく。松田は、育児の伝統から切り離され、不安と孤独のなかで子どもと向き合わざるをえない核家族の両親に、「育児という思想」を伝える助言者として歩みを重ねた。

数十冊におよぶ松田道雄の著作のなかで、一九六〇年に岩波新書より出版した『私は赤ちゃん』は大きな意義を持つ。ここに込められた「赤ちゃんの立場から育児を考える」という松田道雄の思想は、もちろん現在でも色褪せていないが、さらに、『私は赤ちゃん』とその続編『私は二歳』は、戦後日本のメディア史を再考するうえでも重要な

作品なのである。

そもそも、『私は赤ちゃん』と『私は二歳』は、『朝日新聞』の大阪版に連載された人気企画だった。(2) しかし、読者の評判は高かったとはいえ、東京の出版関係者はその価値に気づいていなかった。そのため、松田道雄本人が岩波書店に依頼して、新書化の運びとなったのである。そして新書化されるやいなや、新聞連載時の評判にたがわず、『私は赤ちゃん』と『私は二歳』はベストセラーの階段を駆けのぼっていった。

岩波新書から『私は赤ちゃん』が出版されたことは、「事件」と呼ぶにふさわしい出来事だった。たとえば、昨今の新書ブームの源流のひとつといえる、カッパ・ブックス（一九五四年創刊）を牽引した光文社社長・神吉晴夫は、「時代の流れに着想ーベストセラーの秘密・頭をしぼる創作出版」（『朝日新聞』一九六一年一月二十九日）と題された記事において、「私は「カッパ・ブックス」という書きおろしシリーズを創刊してから、六年と三ヶ月あまりになりますが、その間、他社から出版されたもので、「こいつは、やられた」「あのアイデアは、うちでものにすべきだった」と、編集一同がくやしがった本が三つあります」と述べ、『アンネの日記』と『性生活の知恵』、そして『私は赤ちゃん』の名前をあげている。神吉は『私は赤ちゃん』について、「私たちの目にふれないところで、『大阪朝日新聞』に連載されたのを、岩波新書へ持ちこまれたのだと聞いております。ご縁がなかったんですね」と結び、悔しさをにじませた。

新書という出版形態に、教養だけではなく実用と娯楽の性格を与えた先鋭な出版人は、『私は赤ちゃん』が岩波新書から出版されたことを紛れもない「事件」として受けとめている。なぜなら、赤ちゃんを主人公にした面白い読み物でありながら、核家族向けの育児を説いた教養書であり、実用的な指南にあふれた新書は、まさしくカッパ・ブックスから出されるべきものだったからだ。しかし、「教養」「実用」「娯楽」というカッパ・ブックスの理念を体現したかのような一冊は、乗り越えるべき先達であった岩波新書に奪われてしまった。

『私は赤ちゃん』とは、戦後日本における「生むこと」「育てること」「看る／診ること」の一相を映しだす育児書である。さらに、そこには新書というメディアの伸張をめぐるせめぎあいが織りこまれている。

2　新書『私は赤ちゃん』の特徴

> 出産数が変わらないことは、われわれとしてもわかっていました。ところが、美智子妃のご出産が近づくにつれて、新聞やデパートが“国民期待の皇孫”とか“初のおめでた迫る”とか、さかんに宣伝してくれるので、これはイケると思いました。というのは、アタマの中では“天皇制反対”の女の人でも、毎日のように新聞やテレビで“出産”“お子さま”“ご愛育”とやられると、“私も産んでみようかな”と思うようになる。その心理が育児の本に手を出し、ベビーコーナーに足を運ぶ、というわけです。
> （「お産と育児がどんなに変わったか　ブームの裏側からみてみよう」
> 『週刊新潮』一九六〇年三月七日号）

一九五八年一一月二七日、皇太子の婚約発表を契機に「結婚・出産・育児ブーム」ははじまった。翌五九年四月一〇日の結婚パレードをはさみ、一九六〇年二月二三日には、皇孫となる男児が誕生する。この年、出生数の大幅な増加はみられなかったものの、「赤ちゃん産業」は好況にわいていた。

出版業界に関していえば、大手取次業の東京出

版販売や日本出版販売は、「妊娠・出産・育児」関係書のリストを作って小売店に配布したり、注文カードに「御誕生記念特別常備委託」と刷り込み、書籍のセットを小売店に積極的に発送していたという。また、これまで育児書を出版していなかった岩波新書にも、新たな一冊が加わることとなった。

一九六〇年三月、岩波新書は三冊の新刊――『私は赤ちゃん』『条約と国民』『風土病との闘い』――を発行した。このことを伝える新聞広告は、読者の目をひくものだった。なぜなら、大きな枕に顔をうずめて眠る赤ちゃんの姿（いわさきちひろ・画）が広告の中央を占めていたのだから。

そしてすぐに、この印象的な広告の効果は明らかになる。『毎日新聞』では、毎週火曜日の朝刊に、札幌・東京・名古屋・大阪・福岡の書店を調査対象としたベストセラーランキング（一～一〇位）を発表していたのだが、三月二九日には、東京と大阪の書店で『私は赤ちゃん』が一位を獲得。さらに、翌週四月五日は、つぎのような結果となった。

札幌：①『私は赤ちゃん』（松田道雄著、岩波書店）
②『カミュ集』（世界文学全集、新潮社）
③『風と共に去りぬ一』
（世界文学全集別巻一、河出書房新社）
東京：①『私は赤ちゃん』②『人生は芸術である』
（御木徳近著、東西五月社）
③『カミュ集』
名古屋：①『私は赤ちゃん』②『カミュ集』
③『ジンギスカン』
（小林高四郎著、岩波書店）
大阪：①『私は赤ちゃん』②『カミュ集』
③『人生は芸術である』
福岡：①『私は赤ちゃん』②『カミュ集』
③『説得の仕方』（冠地俊生著、光文社）

その後も『私は赤ちゃん』はすくすくと成長し、四月の一ヶ月間、札幌から福岡までの一位を独占する状態がつづく。これが、一九六〇年を代表する一冊の新書の誕生風景である。

「結婚・出産・育児ブーム」を背景に、数多く書籍が店頭に並べられた。当時の読者は、そのなかから『私は赤ちゃん』を選びとっていく。もちろんこのような人気は、印象的な広告の効果やブームの恩恵にも支えられていた。だがそれ以上に、『私は赤ちゃん』の紙面は、ひとびとを惹きつける魅力にあふれていたのである。

「私はおととい生まれたばかりである。まだ目は見えない。けれども音はよく聞こえる。この産院でおこるいろいろのことも、気配でわかる」に始まる『私は赤ちゃん』（松田道雄・著　いわさきちひろ・画　岩波新書）とは、「赤ちゃんの立場から親たちに注文をする」というスタイルをとった育児書である。誕生から一歳半までにおこる出来事を、見開き一ページでひとつひとつ紹介していく構成をもち、その取り扱う内容は幅広い。小児科医・松田道雄ならではの医療に関する助言だけではなく、日常生活のなかで見落としてしまう危険やつまずきについても言葉が重ねられている。

いくつか例をあげれば、生まれて間もない〈私＝赤ちゃん〉にとって、隣でせわしそうに動く編み棒はとても怖いのだ。[3]「もし電車が急停車でもしたら、あの針が私の目にささるかもしれない」。だから、「私は自衛上、大声をあげて」泣く。また、「排泄のしつけ」がうまくいかないのにも理由がある。[4]「私は、もう大きくなったのです。あんな風に両脚をつかまれて、背中をまげられる恰好がくるしいんです。それに便所がちょっと暗いのが何か不気味なのです。だから、とても排泄する気になんかなれないのです。便所から出てもとの部屋へ帰ってくると、やれやれと思うのです。解放されたという気持です。その気のゆるみで、

今まで緊張していた括約筋がゆるんで排泄してしまうわけです。だからママに意地わるをしようなどという気はさらさらないのです」と、赤ちゃんの本音が語られていく。

江戸時代からすでに育児書は氾濫していたといわれるが、戦後のベビーブームはその勢いをさらに加速させた。東宮侍医――「徳ちゃんのお医者さま」――として知られる緒方安雄の『育児の事典』（実業之日本社　一九五七年）をはじめとし、『私は赤ちゃん』以外にも名著と喧伝されたものは多い。

しかしたとえば、粉ミルクの栄養成分を詳しく紹介する理論的な名著であればあるほど、栄養価の高い粉ミルクをなぜ赤ちゃんが飲まないのかについては触れられない。また、ほとんどの名著には、月齢に応じた標準的な粉ミルク摂取量が紹介されているが、標準以下の量しか飲まない赤ちゃんへの対応にページはさかれない。それゆえ、育児中の読者は考えこまざるをえないのだ。「粉ミルクを飲まないのは、病気だからなのではないか」「摂取量が少ないのは、異常なのではないか」と。分析的な数字や記述を信頼の証とする名著は、ときに育児にともなう不安を増殖させる触媒となった。

だが、『私は赤ちゃん』は、そう簡単に「病気」や「異常」を口にしたりはしない。粉ミルクを飲まない理由は、季節に関係があるのだ。「だんだん気温があがってきた。こういう時は赤ん坊だって汗がでるのだから、のどがかわく。ところが、ママのつくってくれる粉乳は私には、濃厚すぎる。粉乳屋さんは粉乳をすこしでも多く売りたいので、粉乳のうすめ方を、濃厚派の口にあう分量にしている。人間には好きずきがあるんだから、濃厚派ばっかりが粉乳をのむとは限らない。私のような淡白派だってあるんだ」。(5)

『私は赤ちゃん』のあとがきによれば、萎縮した面持ちで子どもを連れてくる保護者と診察室で接する過程で、松田道雄は、親がとらわれる「心配という病」を治療する必要を感じたという。豊富な臨床経験をもつひとりの小児科医として、松田は「標準」への信仰をくつがえす育児書を書く義務を感じ取ったのであろう。

育児に関する迷信からの脱却を第一義に、戦後、育児は科学を目指した。けれどもその結果、「標準」という信仰対象が生みだされ、育児書をとおしてさかんに布教がおこなわれていくこととなる。だが、「標準」への信仰がつのればつのるほど、保護者――とくに母親――はみずからの子育てに負い目を感じざるをえない。さらに、不安を払拭したいと手に取ったマニュアルが、新しい心配を引き起こす。このような悪循環を断ち切るために、松田道雄は、基盤となるものでありながら、標準体重や標準摂取量の影で見落とされてきた視点――「私は赤ちゃん」という視点――から、育児書を書こうとしたのである。

3　新書『私は赤ちゃん』の読者

『私は赤ちゃん』が誕生して一ヶ月が過ぎたころ、『毎日新聞』（一九六〇年四月二六日）では、この書に対する読者評の特集が組まれた。そこに刻まれたつぎの言葉には、「標準」の呪縛から読者を解放したものは、『私は赤ちゃん』にみられる目配りの利いた育児知識であると同時に、「私は赤ちゃん」という視点だったことがあらわれている。

> この本はふつうの育児書とちがって、赤ちゃんの故障や病気を一般的な状況と考え、一般的に治療法を示すのでなく、具体的な赤ちゃんの生活記録からそれを示しているので、わかりやすく、また物語的なおもしろさがある。
>
> （「パパの立場から」）

初めての子には、万事不安感がつきまとう。その子その子で違うんだとわかっていながら、ついわが子は標準児と考えがちなものだ。そんな考えをこの本は打ち破ってくれる。

（「パパの立場から」）

赤ちゃんの立場から書かれているこの本は、他の育児書のように理論めいたむずかしさがなく、楽しみながら大へんおもしろく勉強できた。

（「ママの立場から」）

乳ぎらい、夜泣き、ベッドで寝ない、一度は起こるこうした症状をすべて「病気」に結びつけて気をもむ親たち、一読したら育児ノイローゼにかからずにすむだろう。

（「ママの立場から」）

夢中で読み終わり、改めてさし絵を見なおした次第である。最初の「やかましいのが一ばんきらい」の項は育児関係者はもとより、全部の女性が読むべきだと思った。

（「助産婦の立場から」）

右記の読者評からわかるように、『私は赤ちゃん』とは、父親にも熱心に読まれた育児書である。これは、松田道雄の希望とも一致する現象だった。診療をとおして、家庭における子育ての問題を痛感していた松田は、増大しつつある都市中間層――「パパ」「ママ」という呼称を積極的に受け入れる核家族――の父親を、育児書の読者として引き込み、さらに実際の育児に参加させたいという強い思いを抱くようになっていた。だからこそ、この作品を、岩波新書の一冊として世に送り出したのである。

岩波新書は、一九三八年一一月に誕生した。「現代人の現代的教養」を謳ったその創刊から現在にいたるまで、岩波書店が持つ高踏なイメージと岩波新書のブランド価値は抜きがたく結びついており、知的向上をめざすひとびとを読者として吸収してきている。

一九五九年時の資料によれば、読者のほとんどは都市中間層の成人男性であり、学生三分の一、会社員三分の一、教員・公務員・自由業三分一という構成である。[6] このような岩波新書の読者層は、言いかえれば、いまはまだ子育てに非協力的な父親であっても、「現代的な教養」として育児を説かれれば、「ママ」に協力しようと試みる「良きパパ」へと変化する可能性をもったひとびとだった。

松田道雄と岩波新書との関係は、『結核をなくすために』（松田道雄　岩波新書　一九五〇年）の出版以来、良好なものであった。けれども、松田からもたらされた『私は赤ちゃん』の出版計画に対し、岩波書店内部から「こんな実用書みたいなもの、岩波新書の格が落ちる」との難色が示されたという。[7] 松田の言によれば「だいぶもめた」そうだが、『私は赤ちゃん』は既存の岩波新書の読者層を吸収するだけでなく、男性も読みうる育児書という新たなジャンルを打ち立て、戦後を代表するベストセラーへと成長していったのである。

現在、父親向けの育児雑誌が新たな出版市場として注目されている。だが、「妊娠・出産・育児」ブームにわいていた一九六〇年前後、「パパとしての教養のために男性でも気軽に電車の中でも恥ずかしくなく読めるような本」は、『私は赤ちゃん』をのぞいてほとんどなかった。[8] それは、内容という点においても、「恥ずかしくなく読める」という点においてもだ。

「夫婦の性生活」に関する知識や情報であれば、既存の雑誌など手に入れることができた。また、遺伝などの生物学的な問題については、学校教育で学ぶこともできるし、それを補う専門書は多々ある。しかし当時、男性読者にむけ、赤ちゃんとの日常生活が父親にとっていかなるものなのかを講じる活字メディアは存在しなかった。

そこに、岩波新書初の育児書が登場したのである。「赤ちゃん」とタイトルにあっても、くまのぬいぐるみの挿し絵が含まれていても、岩波新書の装幀がほどこされていれば、書店の店頭でためらいなく購うことができる。通勤時に、電車で読むことも可能だった。さらにページをひらけば、新書の「赤ちゃん」は男性読者へ「パパとしての教養」を説いてくれた。

〈私＝赤ちゃん〉にとって、「サラリーマンであるパパ族が、あまりクタクタになって帰ってくること」は、「はなはだ好ましくない」。なぜなら、育児に非協力的な「パパ」は、「ママに一〇〇パーセントのサービスを要求するから、私たち赤ん坊族には恐るべき競争者があらわれたこと」になってしまうのだ。まだ生まれて数ヶ月の〈私＝赤ちゃん〉は、実際には言葉で表現できないが、「パパ」への要求を持っている。「パパがもっと元気一ぱいで帰ってきて、私を抱いて散歩にでかけてくれたり、お湯に入れてあそんでくれたりするといい。ママの手だすけになるというような消極的な意味から、それがいいというのではない。私はママだけの子ではない。パパの子でもあるのだ。だから私はパパにも、だっこしてもらったりあそんだりしてほしいのだ」。(9)

育児をめぐる考え方は、テクノロジーの発展や時代の変化の影響を露骨に受ける。たとえば、戦後、紙おむつの普及により、布おむつの洗濯という重労働から母親は解放された。しかし近年、エコロジーへの関心が深まるなか、紙おむつの使い捨てを「将来の地球環境を考えない愚行」「子どもの未来を破戒する行為」とみなす論調も出てきている。だが、布おむつの復権がみられる一方で、大手製紙会社が開発したどのような排泄物にも対応できる高級紙おむつは、その価格の高さにもかかわらず大きな支持を受けている。

このような振幅から考えても、育児をめぐる考え方が、育児書というかたちで時代をこえて、生きつづけることは難しい。けれども、松田道雄の『私は赤ちゃん』（一九六〇年）とその続編『私は二歳』（一九六一年）は四〇年以上にわたる人気作であり、松田のもとに見ず知らずの読者から、「自分の家がモデルになったのでははないか」（『私は赤ちゃん』の「あとがき」より）との手紙が寄せられるほどの共感を得た。「私は赤ちゃん」という視点に込めた松田の思想は、性別や年齢、さらに時代を問わず、読者を惹きつけてやまない。

その理由は、『私は赤ちゃん』も『私は二歳』も、読者を明確に想定して書かれているからだろう。松田道雄が呼びかけた読者層――育児に悩む、都市中間層の核家族――は、高度経済成長期以降増えつづけ、いまでは一般化している。この二冊の新書のテーマは、まさに昨今の育児環境を先取りしたものだった。

新書『私は赤ちゃん』『私は二歳』以降も、松田道雄は、著作や新聞連載、ラジオ出演をとおして、みずからの育児の思想を説きつづけた。松田のもとには、本の内容に関する質問や育児相談の手紙が毎日舞い込んだ。さらに、東宮侍医長の診療所のような、医者が絶対権力者として君臨する病院から脱走してきた幼い患者たちが、親に連れられ松田の診療所へ直接訪ねてくるようになった。

このようなひとびとの関わりをとおして、松田道雄は、これまでの著作の集大成となる育児書を書くことへとむかう。そして、一九六七年一一月、『育児の百科』（岩波書店）が完成する。「私は赤ちゃん」という視点にたった育児書であり、医者にかかる場合の親たち――とくに母親――を支援する書の誕生だった。

『育児の百科』では、誕生から小学校入学までの時期が細かく区分されている。「百科」と銘打たれているものの使いやすさが重視されており、日常の育児のなかで感じる具体的な不安――たとえば

「乳を吐く」など――が項目名として採用されている。また、「集団保育」に関する項目の充実も眼を惹く。「子どもの病気」に関しては、疾病別に特徴や注意点がまとめられており、「いそがしすぎて、母親に十分に説明しない医者」の怠慢を補う役割を果たしている。

だからこそ、『育児の百科』は四〇年以上、一六〇万部をこえるロングセラーとなっていった。母が読んだ一冊が娘に手渡され、二世代・三世代にわたるファンもいる。版元で品切れ中の期間は、二倍以上の価格で古書が取引されていたこともあった。

『育児の百科』を出版してから、それまで以上に松田道雄のもとに、読者の手紙が寄せられるようになる。松田は、読者の声を取り入れながら、数度にわたる改訂をおこない、みずからの死の直前に『定本　育児の百科』（一九九九年　岩波書店）をまとめあげた。現在、『定本　育児の百科』は三分冊となり、岩波文庫に収められている。

初版から定本にいたるまで、『育児の百科』には、父親に向けて書かれた内容が含まれている。たとえば、定本の「誕生から一週まで」の章の最初の項目は、「父親になった人に」と題されており、「赤ちゃんが帰ってくる。君もいよいよお父さんだ。家庭のお父さんである君に一言いっておきたい」という松田道雄からの呼びかけではじまる。松田は、母親による子殺しに触れながら、核家族の時代に育児をひとりで背負うことの困難さを説き、父親の協力を訴えた。

> 育児は女の仕事だといって、赤ちゃんに何も事がおこらなかったら、それでもいい。だが、何か赤ちゃんに事がおこったら、よんでほしい。そしていっしょになって考えてほしい。母親である人が、うろたえていたら、「そう、かっかするなよ」といってもらいたい。著者である私も、まったくその気持ちでこの本をかいているのだ。

もちろん、育児における父親の協力を訴えるこのような書き方の原点は、「パパとしての教養」を説いた『私は赤ちゃん』にある。

そして、松田道雄の著作を読んだ父親のなかには、育児に追われる母親に対していたわりの一言をかけるだけでなく、具体的な行動をおこしたひとびとがいた。たとえば、フランス学研究者・多田道太郎（一九二四年～二〇〇七年）をはじめとする大阪府・香里団地在住の読者は、「赤ちゃんからの注文＝松田道雄からの訴え」を受けとめ、公立保育所建設にむかったのだった。多田たちの行動の成果である枚方市立香里団地保育所（一九六二年設立）は、現在でも、地域における育児支援の核として役割を果たしている。[10]

4　おわりに

『私は赤ちゃん』や『育児の百科』が生まれた一九六〇年代と現在を比べた場合、「赤ちゃんからの注文」に耳をかたむけようとするひとびとは確実に増えている。しかし一方で、育児をめぐる困難さは、いまだに消え去っていない。

たとえば、二〇〇一年一〇月、東京都は、全国で初めて児童相談所が取り扱った児童虐待事例の詳細な実態分析をおこない、「児童虐待の実態」を公表した。その四年後の二〇〇五年一二月には、引きつづき「児童虐待の実態　Ⅱ」も公表されており、これらの資料からは、みずから声をあげることのできない「赤ちゃんたちの苦しみ」が聞こえてくる。

東京都の児童相談所に寄せられた児童虐待相談件数を比べた場合、一九九四年度に二二一件だったものが、二〇〇四年度には三〇二六件となって

おり、一〇年間で一四倍近くに増加したことがわかる。この数字は、虐待件数の増加だけでなく、虐待問題を相談できる窓口の認知もあらわしており、一概に状況の悪化と断じるわけにはいかない。しかし、乳児への虐待に関する資料をみるとき、その問題の悪化には愕然としてしまう。

この調査では、児童虐待の重症度を、つぎの五段階に分類している。

「生命の危機あり」
身体的虐待等による生命の危険にかかわる受傷・ネグレクトなどのため衰弱死の危険性があるもの。

「重度虐待」
今すぐには生命の危険はないと考えられるが、現に、子どもの健康や成長・発達などに重大な影響が生じているか、生じる可能性があるもの。

「中度虐待」
継続的な治療を要するほどの外傷や栄養障害はないが、長期的にみると子どもの人格形成に重大な問題を残すことが危惧されるもの。

「軽度虐待」
実際に子どもへの暴力があり、保護者や周囲の者が児童虐待と感じている。だが、一定の制御があり、一時的なものと考えられ、家族関係には重篤な病理が見られないもの。

「虐待の危惧あり」
暴力や・ネグレクトといった児童虐待行為はないが、「たたいてしまいそう」「世話したくない」などの子どもへの虐待を危惧する訴えがあるもの。

「児童虐待の実態　Ⅱ」掲載の二〇〇三年度児童虐待相談件数において、この分類にのっとり「生命の危機あり」という判断がなされた被虐待児の割合は、〇歳児が六二、一％、一歳児が一三、八％、二歳児が三、四％となっている。また想像に難くないことだが、「生命の危機あり」事例の虐待のうち、七三、四％が実母によるもの、一三、八％が実父によるものだ。

なぜ、みずからの子どもに暴力をふるってしまうのか。毎日のように「事件」としてニュースをにぎわすこの問題について、多角的な視点――親の生育歴や子どもの疾病、貧困など――から分析が進められている。なかでもとくに、あふれかえる育児情報が両親にもたらすストレスは、児童虐待の根深い原因のひとつである。

育児をめぐる情報は飛躍的に増え、周産期医療の進展も目覚ましい。行政による育児支援も広がってきている。そしてだからこそ、松田道雄が『私は赤ちゃん』を書いた時代以上に、現在、「標準」への信仰が蔓延しているのだともいえる。保健所で、公園で、カフェで、育児雑誌で、そしてインターネット上で、保護者は子どもを比べつづけ、みずからの「心配という病」を重くしている。このような現状に鑑みても、いま一度、松田の著作のなかに響きわたる「赤ちゃんからの注文」に、耳をかたむける必要があるのではないだろうか。(11)

注

(1) 松田道雄『私の読んだ本』岩波書店　一九七一年

(2) 『私は赤ちゃん』（全五十八回）の連載期間は、一九五九年五月一日～一九日・一〇月三一日～一二月五日であり、『育てにくい子　私は二歳』（全六十三回）の連載期間は、一九六〇年七月一九日～八月二五日・一一月五日～一二月九日である。岩波新書の『私は赤ちゃん』に付されたあとがきによれば、この二作は『朝日新聞』の大阪版だけでなく、「九州や名古屋の版」にも転載されていたという。だが、東京版には掲載されていない。

(3) 『私は赤ちゃん』（松田道雄　岩波書店　一九六〇年）第一章「生まれて半年」、「電車…編み物はよして」より。

(4) 『私は赤ちゃん』第二章「誕生前後」、「排泄のシツケ…反抗期」より。

(5) 『私は赤ちゃん』第一章「生まれて半年」、「乳ぎらい…個性をみとめてください」より。

(6) 鹿野政直『岩波新書の歴史』岩波書店　二〇〇六年

(7) 「座談会『岩波新書』を語る」（参加者：貝塚茂樹・桑原武夫・松田道雄・吉川幸次郎、『図書』三三三号　一九七七年五月）より。

(8) 「読書室　新しい育児書ほか」『サンデー毎日』一九六〇年七月一〇日号

(9) 『私は赤ちゃん』第一章「生まれて半年」、「パパ」より。

(10) 多田道太郎が、『私は赤ちゃん』について記した文章として、たとえばつぎのようなものがある。「『私は赤ちゃん』の出た直後、わたしたちの有志は安保の衝撃もあって地域の市民団体をつくった。そしてその目標の一つに「保育所の建設」をえらんだのであった。これはいうまでもなく『私は赤ちゃん』の影響であった。というより、わたしたちはそういう方向に『私は赤ちゃん』を読みとったのであった。働く女性のみが赤ちゃんを過保護から解放することができる。また人間として独立した女性のみが、生きた教訓を赤ちゃんに与えることができる。そのためには保育所がどうしても必要だ。そういう考えを、ここから読みとったのである。経済の問題もないではないが、これは主として文化闘争であったと今でもわたしなどは思っている。松田先生はここの地域の運動に無償の援助をおしまれなかった。この本が出て三年後、われらの団地に公立保育所ができあがった。先日もサルトル氏とボーヴァアール女史がこの保育所を訪ねられ、ベッドの少ないのが不満のようにいわれたが、しかし、日本で唯一の公立の乳児ベッドというだけで、これはひとつの橋頭堡ではあると思う。」（「戦後ベストセラー物語」『朝日ジャーナル』一九六六年一〇月三〇日号）

(11) 本稿は、これまで『私は赤ちゃん』めぐってまとめてきた一連の拙論（「サルトルとボーヴォワール、団地へ行く」『未来』四八〇号　未来社　二〇〇六年九月、「サルトルとボーヴォワール、保育所へ行く」『未来』四八二号　未来社二〇〇六年一一月、「赤ちゃん、新書になる」『未来』四八四号　未来社　二〇〇七年一月、「赤ちゃん、映画になる」『未来』四八六号　未来社　二〇〇七年三月、「赤ちゃん、映画になるその二」『未来』四八八号　未来社二〇〇七年五月、「映画『私は二歳』の位相――シナリオの特徴」湘北短期大学『湘北紀要』二八号　二〇〇七年三月）を補うものである。

〈資料1〉

『私は赤ちゃん』の初出の例
（『朝日新聞』大阪版・夕刊
一九五九年一二月五日）。
岩波新書判とは、挿絵が異なっている。

むすび

育児過剰型を心配

ほしいパパ・ママの知性

松田道雄

きょうは「赤ちゃん」としての私でなく、小児科医としての私の

え・前田藤四郎

ちゃん」の家庭は、私の若い友人で団地に住んでいる二、三の諸君の家庭をモデルにしました。話が力ミ屋とか生活の興味を保中して、ン待チョウ感覚過ぎたのでパパをかなり戯画化してしまいました。モデルと目されるかたが、どうぞ名著キレンで読まないようにお願いします。モデルになったパパは、ほんのパパ＆新聞が目をたんたんと思わしていくさい。

新聞の世論調査にはいつも「わからない」で通していられると、この話に出てきたような危険な三振型のパパになってしまうかと思います。そのうち所やわ間を見る眼をなんなんと思わしていくさい。

たゞし現実においてパパたる人びとが、週刊誌とお笑い番組とプロ野球とに生活の興味を集中して、

るので、性エキシ

ているれたGとでしょう。でも、安心下さい。木目でこの話はおわりますから。

モデルになられたママは、ここに出てきたママよりもはるかに、おしとやかであられるとは保証いたしますが、現実にはこの話の程度に箱線的であっていいと思います。ラジオの婦人番組はほんとに問いて下さい。あまり知識を仕入れるとパパに恐縮感にはられはしないかと心配されるときもあるかもしれませんが、心配無用です。ほんとうの知性は静かなものです。知性のない感情性が恐縮反応を引きおこすだけです。恐縮反応というのは防御本能から来る操想（クモが敵にあうと死んだまねをするようなもの）にすぎません。

最後に主人公の「赤ちゃん」についてですが、彼は幸福な子です。だがママが電気製品の利用で余暇が多くなるにしたがって「育児過剰」になる危険を多分にもっています。「私は赤ちゃん」を切り抜いてためっているなどというママもいくらか過剰型です。ご用心なさい。危険の起こらない条件を余暇が多くなるにしたがって「育児過剰」になる危険を多分にもっています。「私は赤ちゃん」を切り抜いてためっているなどというママもいくらか過剰型です。ご用心なさい。危険の起こらない条件を

一つとして結核の予防にBCGを

しておいてもらって下さい。「赤ちゃん」にBCGをうけさせるものりでいましたが、残念ながらこれ以上話せできませんでした。

奈良の一晩寝から、よその家へ行って子供に食べものを渡されるのは、母親の育児計画を台なしにするのだから、他人の子供には食べものはやらぬというようにしてほしいという投稿をいただきました。そのほか話のなかに組み入れられなかった投稿が多くありました。投稿を下さった方にすまなく思っています。＝おわり

（小児科医・評論家）

岩波新書

3月の新刊

私は赤ちゃん

松田道雄著　100円

……「おやがは
うつむいてねるん
です。それで今、宇宙人とちがわるいんじゃないかって話していたんですの」このママの話えに答りの奥さんは即座に答えた。それはきっとヘソトウ眼が大きいのよ。切ってもらわないと、バカにみっちゃうわ」どうしてこのおばさんは、世界を楽観的に解釈するんだろう。傍観明たんだなあ。シゲキを求めて、事件を期待しているんだ。

私は、うつむいてねるほうがらくなんだ。大地にしっかりとつかまっていたいんだ。やわらかいクッションに胸を押しあてているほうが、気持がいいんだ。私は自由ところがれるのだからうつむきが苦しかったら、ひとりでに上をむくさ。らくだから、こうやってねられるんだ。……「私は赤ちゃんより

はじめての赤ちゃんを育てることは，母親にとっても父親にとっても，大きな不安があり，その病気ほど親たちをあわてさせるものはない．診察室で毎日さまざまの赤ちゃんに接している著者が，親がどうして赤ちゃんを病気と思うようになったか，親の心配過剰を考察する．さらに赤ちゃんが親たちや他の大人から，かなり不当な取扱いをうけていることを感じ，赤ちゃんに代って社会に注文を出した．大阪朝日新聞に連載，好評を博した

条約と国民

石本泰雄著　100円

条約や協定を国民はどう考えたらよいだろう。本書は、国際法を守ることの意味からはじめて、国際連合の役割・集団安全保障の意義をあきらかにし、日米新安全保障条約の性格を平和共存、軍縮の発展という今日の世界的潮流のなかで考える。さらに、国際法と憲法の関係をただして、主権者である国民が国際的な関係をどうしたら正しく発展させるかという課題に多大の示唆をあたえる。新しい国際法入門

風土病との闘い

佐々学著　100円

アジアには二億の風土病患者がいる。わが国でも僻地や孤島の住民は足が象のように太くなったり、腹に水がたまって早死する奇病に苦しんできた。本書は、この憂うべし風土病の根源を追って著者が各地を歩いて研究した記録である。蚤魚の刺身から感染する九州の肺ロ虫病の話、人間が近づくと活動はじめるツツガムシの話、蚊や蝿を退治した話等、興味深い中にも環境衛生の問題について読者の反省を促す

▼好評の新刊・重版より

誤まった裁判　上田誠吉・後藤昌次郎著……100
ジンギスカン　ストロング著　西園寺公一訳……100
人民公社は拡がり深まる　石井孝著……100
明治維新の舞台裏　亀崎豊樹著……100
心で見る世界　山本藩著……100
中南米―ラテン・アメリカの政治と経済―　家永三郎著……130
日本文化史　大内・有沢・脇村・内藤著……150
日本経済図説（第二版）

岩波書店　東京・神田・一ツ橋　振替東京2624C

〈資料2〉

『朝日新聞』（一九六〇年三月二一日）に掲載された岩波新書版『私は赤ちゃん』の広告。

The features of “I am a baby”
- Research on print media of postwar Japan -

NAITOU Hisako

【abstract】

“I am a baby”, Iwanami Shinsho was published in 1960. Michio Matsuda insisted, “It is necessary to think about the child care from baby's standpoint” in this book. His insistence is still meaningful. Moreover, “I am a baby” and “I am two”, the sequel of “I am a baby”, are important also for reconsidering the history of print media of postwar Japan.

【key words】

Michio Matsuda, print media of postwar Japan, Shinsho, “I am a baby”